ジーコの日本サッカーへの影響に関する研究：鹿島アントラーズでの活動を中心にして

The Influence of Zico on Japanese Soccer through Kashima Antlers

1K03A010-3　　氏名　安藤　隆友

指導教員　主査　石井　昌幸　先生　　副査　内田　直　先生

はじめに

日本サッカー界は、２００２年６月に行われた日韓共催サッカーワールドカップを契機として飛躍的な発展を遂げた。その嚆矢となったのは、言うまでもなく１９９３年に開幕したＪリーグであろう。特にその黎明期においては、数多くの外国人選手・指導者の貢献はきわめて大きなものであった。「サッカー界の神様」ジーコは、そのなかでもわが国のサッカー界に多大な影響をもたらした。本研究は、彼の日本での活動の足跡をたどりながら、ジーコが日本サッカー界に残したものは何だったのかを検証することを目的とする。

第１章　ジーコ以前：住友金属蹴球団時代

１９４７年、大阪市に住友金属蹴球同好会というサッカーチームが設立された。同クラブは５６年に住友金属蹴球団と改称、７５年に鹿島に移転した。当時、住友は日本サッカーリーグ(ＪＳＬ)リーグ２部に所属し、２度１部に昇格したものの、すぐに２部に降格してしまう程度のチームであった。そんなチームに１９９１年、ジーコが加入したのである。ジーコはいかにしてチームを変えたのであろうか。

第２章　ジーコによる意識改革

１．リーダーとしてのジーコの力

Ｊリーグ開幕前に行った遠征での大敗をきっかけに、監督がいたにも関わらず、ジーコは色々な面でチームの指揮をとりだした。ジーコが行ったことの中心は、「プロ意識」を植え付けるための意識改革であった。

２．ブラジル人と比較した日本人的な考え方

ブラジル人は結果をとても重視している。対して日本人は頑張ることで評価される。これではどこかで妥協が生まれてしまう。そこで、ジーコはどんどん大きな目標を設定して、世界を目指すチームを志した。

３．選手の意識改革

ジーコは選手個人に高い目的意識を持たせるようにした。それは漠然とやるよりも目標が定まっている方が、成果が出るからである。そして、目標を細かく明確に提示していった。

４．外国人選手や監督

いまだにＪリーグでは外国人選手が活躍しているように、日本サッカーのレベルを上げるためには外国人の選手や監督が必要である。鹿島アントラーズは多くのブラジル人を起用して、全体のレベルを上げようとした。

５．選手たちの役割を考える

サッカーではエースナンバーとして１０番があるが、１０番を付けている選手だけではサッカーにならない。本田選手のような目立たない選手こそチームには必要である。

６．控え選手の重要さ

サッカーでは控えの選手が途中出場で結果をだすことが多い。控え選手が頑張り、チーム内で切磋琢磨する環境ができることで、チームに良い影響を与えられる。

７．地元に密着した環境

ジーコはブラジルでのスポーツ庁長官としての経験を生かし、鹿嶋市に練習場から選手の住居までを集結させて地元に密着したチームを作ろうとした。

８．サポーターを大事にする

ジーコはサポーターあってのプロスポーツであると考えていて、サポーターを大事にすることを選手たちに見本を見せながら伝えていった。

９．信頼を持つということ

サッカーは誰か一人の力ではなく、監督や選手、スタッフ、フロントといった全員の信頼関係が築き上げられてこそ勝利を収められるのである。

１０．ジーコが総監督として戻ってきた理由

高いレベルでサッカーをするため、監督一人ではかなりの激務になること。ジョアン・カルロスとの二頭体制は成功を収めた。

第３章　ジーコが鹿島アントラーズで成し得た結果

ジーコが総監督になってから、主要なタイトルをすべて獲得し、現時点で９冠している。そして、日本代表監督に就任することになった。

第４章　ジーコの関わった鹿島アントラーズと日本代表

どちらとも、「信頼」ということを大切にし、大きな目標を掲げていた。しかし、結果は対照的になってしまった。

終わりに

ジーコは鹿島アントラーズや日本代表で、リーダーとして、「信頼」と「サポーターを大事にする」ということを選手たちに伝えていった。結果こそ対照的になってしまったが、日本サッカーに常に関わっていたジーコこそ、日本サッカーを支えた人物と言えよう。